憂楽帳

白寿

兵庫県西宮市の有岡富子さんは今年5月、99歳になった。先月、約2年ぶりにお会いし「ご無沙汰です」とあいさつすると、車椅子に座ったまま私の手をぐっと握った。白寿とは思えない力強さだった。

阪神支局長時代に高齢者介護の取材で出会った。富子さんは10年ほど前から認知症の症状が出て、今は普通の会話はできない。だが、自分で食事もできるし、意思表示もできる。この日も娘の陽子さんたちと居酒屋に行き、一緒に酒のさかなを食べ、少しだがビールも口にした。

「お肌、前より若々しくなってませんか?」と私が酒席で陽子さんに話すと、横でうれしそうにしている。言葉のキャッチボールはできなくても、自分がほめられていることは分かっている。

富子さんは以前から、陽子さんと2人暮らしだ。「私のことを忘れちゃったの?」。陽子さんは富子さんの認知症に戸惑い、涙を流したこともあったが、今は「母は昔と変わっていません」と話す。

白寿の誕生日は、在宅介護を支える医師や介護家族の仲間が集まって祝ったという。100歳になる来年は、私も参加させてください。

【香取泰行】

2014.8.13

毎日新聞（夕刊）2014年8月13日(水)